

マーガレット・パウーズという女性が「足跡」という詩を残しています。「ある夜、私は夢を見た。私は、主と共に、なぎさを歩いていた。暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出されていた。どの光景にも、砂の上にも二人分の足跡が残されていた。一つは私の足跡、もう一つは主の足跡であった。これまでの人生の最後の光景が映し出された時、私は砂の上の足跡に目を留めた。そこには一つの足跡しかなかった。私が人生で一番つらく、悲しい時だった。このことがいつも私の心を乱していたので、私はその悩みについて主にお尋ねした。『主よ。私があなたに従うと決心した時、あなたは、すべての道で、私と共に歩み、私と語り合ってくださいると約束されました。それなのに、私の人生の一番つらい時、一人分の足跡しかなかったのは何故ですか。一番あなたを必要としていた時に、あなたが、何故、私を捨てられたのか、私にはわかりません』。主はささやかれた。『わたしの大切な子よ。わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に、足跡が一つだったのは、わたしがあなたを背負っていたからだよ』。

人生に疲れ、重荷を負って押しつぶされそうになっているとき、多くのキリスト者を励ましてきた詩です。エオマの旅人の物語を改めて読んでみて思い出しました。

エマオ物語は、イエスが復活した後、12弟子に属さない二人の弟子がエマオへと逃げている最中に、ある旅人が同伴し始めるのです。その旅人がイエスであることは読者には明らかにされているのですが、二人の弟子の『目は遮られていて、イエスだとはわからなかった』(16節)ので、イエスだとは認知できないのです。二人はここ数日エルサレムで起こったことを知らないのですかと、その旅人に聞くのですが、『イエスは「どんなことですか』(19節)と尋ねると、二人の弟子はナザレのイエスがイスラエルを解放してくださいと望みをかけていたが、十字架にかけられて今日で3日目になったこと。ところが、仲間の婦人たちが遺体を探しに行ったが、遺体を見つげずに戻ってきたこと。そして、婦人たちに天使が現れて「イエスは生きておられる」と告げたということです。仲間の者が何人も墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言った通り、遺体はなかったことなどを告げたのでした。

それを聞いたイエスは『ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったではないか』と叱責して、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたって、ご自分について書かれていることを説明されたのでした。

この物語は、エルサレムから60スタディオオン(≈11キロ)離れたエマオという村に向かう二人の弟子が復活したイエスに出会って、エルサレムに戻るといふ物語です。イエスの逮捕でチリジリになった弟子たちがエルサレムに戻って初期キリスト教の伝道を開始するという歴史的な出来事の一つを裏付ける物語とも解釈されます。

このエマオ物語は他の顕現物語と似た要素を持っています。まず、イエスの死後、弟子たちは危機的な状況にある。そのような状況下で、復活者イエスは不意に現れる。けれども、彼ら弟子たちはイエスとは認知しない。以上の3点が共通しているのです。

特にエマオ物語はこの認知のテーマが初めから終わりまで強く表されています。おそらく、エルサレムから一刻も早く逃れて安全なところに身を隠したいと考えたクレオパともう一人の弟子は、エマオへの道を急いでいました。『イエス御自身が近づいてきて、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとはわからなかった』(15〜16節)のです。彼らがイエスを認知できない様子を表しているように『二人は暗い顔をして』(17節)立ち止まり。二人はイエスの死と空の墓について説明をします(18〜24節)ところが、イエスは彼らが認知できないことに対して、『ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちが言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか』(25節)と叱責するのです。それでも二人はなお気づきません。しかし、エマオという村に入って、宿と一緒に泊まることになって、食卓でイエスがパン裂きをしたとき、弟子たちの目が開けてイエスだとわかったのです。

このエマオの物語は聖書の中でも、特に印象深いものです。これについて、聖書学者である三好迪(みち)という方が、ルカ福音書記者はアリストテレスの創作論を用いていて、このエマオの物語を書いていると推論しています。もちろん、ルカ福音書記者はアリストテレスを実際には知りません。けれども、この時代のヘレニズム世界にも、アリストテレスの創作論によるドラマ性は一般に周知されていたようです。

ドラマ性を高めるために、イエスの不認知―認知をテーマにしてドラマが展開するように組み立てられていて、ドラマは未解決部分と解決部分の両極なつて展開していく。エマオの途中での出来事、二人の弟子がイエスと知らずに道で出会ったと、彼らの間での会話はすべて未解決部分です。しかし物語の解決は28節で彼らがエマオ村に到着しときに始まり、パン裂きによって二人の弟子たちがイエスを認知したときに頂点に達しているのです。

けれども、物語の中で復活者イエスに気づく舞台装置を作るために28節で『一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった』ので、二人の弟子はイエスを強いて留まらせていたのでした。これは、イエスがこのままエマオに宿泊せずに行ってしまうと、物語の解決がなくなってしまう。この旅人がイエスであるといまだ知らない二人は、このままではイエスを認知ないまま終わってしまうことになります。道中で「物分かりが悪く、心が鈍い」と言った彼らに、旧約聖書からすべてを説明してもまだイエスを認知しないのであるから、ドラマは中途半端のまま終わりそうになる。ですから、読者にドラマ性を高めるために、『イエスはなおも先へ行こうとれる様子だった』という句を入れたのです。29節から31節を原文に忠実に訳すと「わたしたちと一緒に泊まりください。……彼が彼らと一緒に食卓につかれたとき、パンを取り……彼らに渡しておられた。と、彼らの目が開けて、彼を認知した」となっていて、復活者と弟子たちの密接な関係性があかさされているのです。

このように、イエスとの食事は現代においては聖餐式として執り行われており、そこに復活イエスが臨在しておられることを聖餐にあずかるたびごとに、私たちは立ち会っているのです。私たちが復活のイエスに聖餐のたびに出会っていることを、エマオでの弟子たちと共に喜びたいと思います。



